



→師走前。江戸川が一瞬、穏やかな表情を見せるときがある。それが、この日曜日だった。夕方からは空一面を黒い雲がおおいつくした。この時期の富士に沈む夕陽はそのおかげで見えなかった。



↑壁一面を埋め尽くす蔦紅葉もいいが、小学生の登校の列のように木の幹をはい登る蔦もいい。

俳句の世界には「草紅葉」という言葉があるそうだから、「蔦紅葉」だつてあるだろう。

江戸川の台地を下りながらそう考えていたら、緑の蔦が木の股のあいだに隠れるようにあった。だったらこいつは蔦緑なのだろうか。

まさか？

「蔦緑はないだろ、やっぱり蔦は紅葉だよ。俳句の季語だつて蔦は秋だよ」

若舟頭がそういったら、

「ツタのくからまゝるチャペルに」と、横で嫁さんが口ずさんだものだから話がこんがらがってきた。

「うくん、それって秋じゃないよな、どちらかっていうと夏。それも初夏」

おもわず私は、うなつてしまった。さつそく家に帰り俳句歳時記を繰ってみた。やはり蔦は秋の季語だった。

行く秋や松にすがりし蔦紅葉

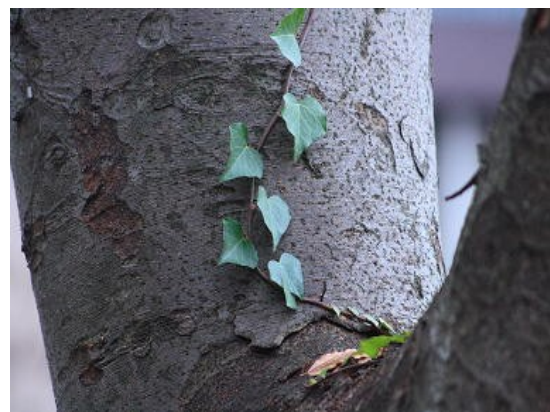
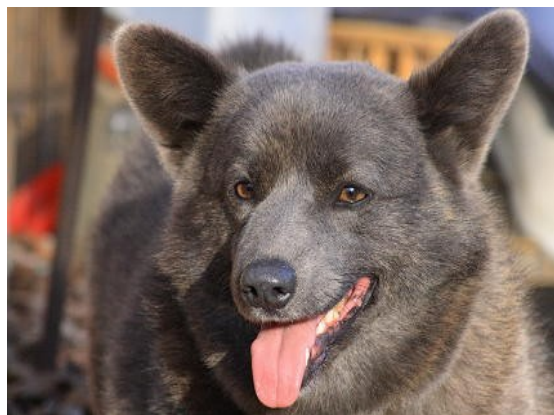
蔦まとふ堀に窓あり家中町

子規

正岡子規はさらりと詠み込んでいる

今週のクマ

→顔だけ見ると大人びてきて、りりしさが感じられるが、本格的な冬を前にしてクマは丸々と太ってきたように見える。冬用の毛皮にかえたのだろうか。それとも、脂肪を蓄えたのだろうか。でも、ハンサム？ ちがうな、女の子だった。



↑あたりがみな色づくのを恥じるかのように、木の幹と幹のあいだにひっそりとはい登るのはキヅタ。

が、これだったらチャペルにからまるツタのほうがいい。そうおもいながら和歌のほうをみると、

秋こそあれ人はたづねぬ松の戸を

幾重もとちよ蔦のもみぢ葉

『新勅撰集』式子内親王

つたかへでしげる山ぢのむらしぐれ

旅行く袖に色うつりけり

『拾遺愚草員外』藤原定家

さびしさを色に出でにけり蔦かづら

くる人もなき軒にかかりて

『東歌』

俳句も和歌も蔦には爽やかさが無い。

やはりチャペルか。西洋つぼさが似合うのか。そのとき、やはりなとおもった。

そういうえば、日本では家紋に使われている。それも幕府寄り添い大名の。

もつとも、蔦紅葉とは関係がないが、

津藩藤堂家、本荘藩六郷家、棚倉藩松井家など、いずれも松平の名をもらった大名家だ。ほかには女紋としても多用されたいらしい。あなたと離れないわと……。

仁王にもよりそふ蔦の茂りかな 園女

蔦は、けなげなのか。寄り添う物がなければ生きていけない。